

『中年期の危機の時期と心的態勢に関する研究』

一般企業就労男性を対象として

立命館大学大学院

応用人間科学研究科

臨床心理学領域

苗村 勝俊

本研究の目的は、一般企業就労男性を対象に、特に中年期の危機が生じるとされるその時期と中年期の危機と呼ばれる心的態勢を精神的健康との関係から検討することであった。回答対象者は、30代から50代までの214名(平均年齢44.52歳,SD 7.01,年齢範囲31.00歳~58.43歳)の一般企業就労男性であった。調査の結果、以下の5点が明らかになった。1) 中年期の危機が暦年により生じるものではないことが示唆された。2) 一般企業就労成人男性において中年期の危機と呼ばれる「心的態勢」の構造は示唆され“ 中年期的危機の心的態勢 ”と名付けた。「これまでの人生の否定」と「老いと死への不安」が独立して「自己限界感の認識」に影響を与え、その「自己限界感の認識」が「精神的健康」に影響を及ぼすことが示唆された。「これまでの人生の否定」には「質的負荷」が、「老いと死への不安」には「主観的中年年齢」が影響することが示唆された。3) 職場におけるストレス認知である「質的負荷」が、「自己限界感」「これまでの人生の否定」「憂鬱感」に、また、「量的負荷」は、「イライラ感」「疲労感」に影響を及ぼすことが示唆された。先行研究では、職場におけるストレス認知である「質的負荷」「量的負荷」が直接「精神的健康」の「疲労感」に影響を及ぼすとしているが、本研究では「質的負荷」は中年期の「心的態勢」の中の「自己限界感の認識」に最も影響を及ぼすことが示唆された。4) 「家族のサポート」は一般企業就労成人男性の「心的態勢」や「精神的健康」には影響を与えない。このことから、一般就労男性においては「家庭」よりも「職場」の要因が大きく影響することが示唆された。5) 「自己限界感の認識」は、男らしさを否定することに影響を及ぼすことが示唆された。このことは、中年期の危機を防衛するものとして、男性的役割と女性的役割の両方を持つ(人生後半で統合された両性的な人格構造)必要性が推察された。